



愛友会四国連合会報

第 33 号
56. 1

目 次

年頭にあたって……………四国電気通信局長……………二
 年頭のごあいさつ……………電友会四国連合会長……………二
 電徳島温古会総会……………三
 愛媛電友会総会……………三
 扶養控除等申告書……………三
 秋の生存者叙勲……………四
 事務局から……………四
 電信電話記念日の表彰……………四
 表紙のことば……………四
 共済会だより(土)……………四
 特 集……………六
 酉年にちなんで……………六
 赤羽 正 水口村太郎 豊崎二三男 山口 初樹
 志摩 邦康 鴨谷 直行 長島 稔 平井 孝昌
 福山 登 藤井 彰 横井 貞夫 陶山 靖子
 OBサークルだより(愛媛)……………九
 川 柳……………福田秋風郎・合田 勇……………二〇
 随 筆……………上田 昇・後藤 稔……………二
 酒井 秀雄・高橋 数一……………二
 俳 句……………(高知)……………三
 余業・訃報……………三
 編集後記……………三

年頭にあって

四国電気通信局長
藤田 史郎



電友会の皆さま
明けましておめで
とうございます。
皆さま方には、
ますますご健
佳い新春を迎えら
れ心からお祝い申
しあげるとともに、今年も健康で明るい年で
ありますようお祈りいたします。
旧年中は公社事業につきまして格別のご協
力ご支援を賜り深く感謝申し上げます。
電友会が発足してから十三年目を迎え、会
員数も約一千四百人となるなど、年を重ねる
ごとにますますご発展を続けられましたことご
同慶にたえません。

私も電電話事業につきましては、創業
以来百有余年、幾多の困難を克服しながら、
設備の拡充とサービスの改善に努力してまい
りました。お蔭様で全国の加入電話は三千
八百万加入を超え、今や、他に類のない巨大
な電気通信網が形成され、事業規模、サービ
ス、技術面においても世界最高水準に達する
までに成長いたしました。

このような、めざましい進歩発展を遂げる
ことができたことは、ひとえに先輩の皆
さま方が電電話事業を生がいの仕事として、
営々と築きあげられた成果の賜ものと、深く
肝に銘じているところであります。
公社発足以来の念願でありました、「すぐ

つく電話」「すぐつながる電話」の二大目標
をすでに達成し、需給均衡の時代を迎え、私
たちは、あらゆる面で従来の考え方やきずな
にとらわれることなく、新しい感覚をもって
よりキメ細かいサービス業としての本来の仕
事に取り組みなければならぬわけでありま
す。

積極的なマーケティング活動による顧客ニ
ーズの把握と販売体制の充実、データ通信、
画像通信など、いわゆる、非電話系サービ
スの発展に備えた電子交換機の設定や、台風や
不測の事態に対応するための伝送路の二ルー
ト化、さらには、地集の一般化や過疎地対策
など重要な課題が山積しております。

またこれからは、より地域社会に密着した
事業活動を展開しなければならぬわけであ
ります。

三全総の定住圏構想に基づく四国地方の地
域開発計画にそった理想的な通信システムを
つくりあげることが、私たちの使命と考
え、十分にその役割を果してまいりたいと思
います。

一方、昨今の公社をとりまく経営環境は従
来にもまして、一段とその厳しさを増してお
ります。私たちは、これらの事実を冷静に
うけとめ、どのような変化にも対応できる心
構えと、未来を先取りする精神で前進しなけ
ればならないと考えております。

諸先輩が築かれた事業基盤を守り、全職員
一人ひとりが、「お客あつての事業」という
深い認識にたつて独占事業が陥りがちなひと
りよがりや、安易感を自戒しながら事業の発
展に全力を尽したいと思つております。

皆さまには、いつまでも私たち後輩に対し
てご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいた

します。

これからは、ますます地域社会とのかかわ
りあいが大切になって参りますが、電電話
事業を愛され、深いご関心と、ご理解を持
ておられる皆さま方には、ぜひとも地域社会
と公社事業との接点になっていただき、ご支
援いただければ幸甚に存じます。

終りになりましたが、皆さまのますます
のご健康とご多幸並びに電友会のご繁栄を心
からお祈り申しあげ、私の新年のごあいさつ
とします。

年頭のごあいさつ

電友会四国連合会長

泉 節太郎



明けましておめ
とうございます。
会員の皆さん、
元気でよいお年を
迎えられましたで
しょうか。

四国における電
電退職者の会の会員も、今年度は、新入会者
一八一名(四国全体、以下同じ)を迎え、会
員総数は一、三三四名になりました。会員が
年々増加いたしますことは、各県の会はもと
より、四国連合会の発展をも象徴しているも
のと考え、ご同慶の至りに存じます。

さて、昭和五十五年度における恩給や年金
の改善については皆様ご承知の通りでありま
すが、五十六年度については、未だ概算要求
の段階であります。これから政府の予算の編
成、国会の審議という関門がありますので、
果してどれだけ改善せられるかは、明確な予

想はできませんが、概算要求としては、仮定俸給に対し四・二兆プラス五三〇〇円、そして最高限度年額一八八、四〇〇円ということになっております。

われわれとしては、少くとも概算要求の程度はと思ひ、四国選出国會議員をはじめ、政府その他関係要路の筋へ、それぞれ実現方陳情を行つております。皆さんとともに、この行くえを見守つて行きたいと思ひます。

次に、さいきんの注目を要すべき問題として噂されているものに、電電公社会計から、一般会計への納付金制度の問題があります。その趣旨とするところは、政府財政不如意の折柄、電電公社にも、応分の寄与を、というにあるようであります。

一般会計納付金制度については、一つの前例があります。それは昭和九年通信事業（郵便・電信・電話）特別会計を設定するとき、「一般会計が大打撃を受ける」と、大蔵省の大反対に対する妥協の産物として、「通信事業特別会計は、一般会計に対し、毎年八千二百万円を限度として繰入を行う」というのがそれで、その後戦争の進展につれて、納付額も増加してゆきましたが、戦後はこの制度は立ち消えになっていたのではないかと思ひます。

ところが形としてはそれが再燃した恰好であります。政府の財政再建の必要なことはわかりませんが、それがためには、行財政の整理改革をはじめ、一般の総選挙における公約等をまず実施すべきではないか、それを実施した上でなお財源不足というのかどうか、そこがポイントではないかと思ひます。

公社財政の良否は、間接的ではあつても、われわれOBにもひびいて来るものがあると

思ひます。われわれはこの問題の行衛を、深い関心をもつて見守りたいと思ひます。

電 德 島 温 古 会 総 会

第十九回総会は、十月二十八日十時から徳島駅前阿波観光ホテルにおいて、会員一四三名の出席のもとに開かれた。

冒頭物故された会員の方々に、弔意黙禱を捧げた後、豊崎会長のあいさつ、次いで新顧問山崎通信部長、本田徳島報話局長並びに福永眉山会長のあいさつ、さらに参議院議員長田、西村両先生の祝電が披露された。

新会員の紹介に続いて、喜寿、古稀の方々に記念品を贈つて、会員一同が祝意を表した。

このあと、池田喜代美氏を議長に選出して議事に入り、五十四年度業務報告、同会計報告、五十五年度事業計画、情報連絡体系の整備等、原案どおり承認可決された。

毎年多数の会員が増加する中で、各会員への情報連絡体系が確立されたことは、緊急時にもとより会員相互の親睦と融和緊密化に寄与するところ極めて大きい。

また今回は、活発な意見も多く出された。特に給与所得者の保険料控除申請書の提出問題については、執行部としても苦しい答弁に終始したほどであった。

なお役員改選については、現豊崎会長が満場一致で再選され、他役員も一部を除いて殆んどが留任となつて議事を終了した。

引続いて午後の懇親会は、通信部長のあいさつ、会長の謝辞、青山金治氏の乾杯で始まり、マジッククラブ会員の日頃の習練成果の発表もあつて、一層興を添え、盃を重ねるにつれ、元気なほど自慢も出て、場内はなごやかな談笑が一段と大きく続いた。（越久田記）

愛 媛 電 友 会 総 会

第十九回総会を菊花薫る十月二十八日、午前十時三十分から、ホテル奥道後において開催した。稀にみる晴天に恵まれ会員六〇〇名中三二〇名が出席。堀内善一氏を議長に選び泉会長のあいさつのもと、安部愛媛電気通信部長が祝辞を述べられ、八十年代の幕明けの年に対応する公社の課題と抱負について語られ、併せて管内における電気通信事業の近況についても説明された。つづいて、新会員の紹介、物故会員に黙禱、祝電寄付披露のあとと議事にうつり、五十五年度業務報告と会計報告を承認、五十六年度事業計画と収支予算を決定した。また喜寿七名、古稀十九名の方々に記念品を贈呈し、最後に役員改選にうつり、会長副会長を再選し、その他の役員も全員再選され午後〇時半閉会した。ひきつづいて午後一時から錦晴の間で愛媛電気通信部長ご招待の懇親会にうつり、久し振りに相見のお互いの健康を確かめ合い、再会を期して午後二時乾杯のあと散会した。（渡部記）

扶 養 控 除 等 申 告 書

お出しになりましたか。提出期日は一月十日です。年金を主たる収入としている方は扶養控除対象者の有無、年令にかかわらず、すべて申告書を四国電気通信局職員部厚生課共済係へご提出下さい。今後共済年金関係書類の提出については、先般職員部厚生課から送付された年金受給者年間提出書類一覧表（五十五年度源泉徴収票送付の際同封されております）を十分参照され必ず提出をお忘れなく。

また確定申告の期間は二月十六日から三月十五日までです。該当する方は最寄りの税務署に申告をしてください。



勲七等瑞宝章
水口村太郎さん



勲七等旭日章
金丸 正雄さん

事務局から
昨年春の生存者叙勲の榮譽をうけられたお二人の近影が届きましたから掲載いたします。

秋の生存者叙勲

昭和五十五年秋の叙勲に左記の方々が多年にわたり電気通信事業に貢献されたご功績により叙勲の榮に浴されました。私ども一同このころからお喜び申し上げます。

- 勲四等瑞宝章 佐々木 光殿 (松山)
- 勲五等瑞宝章 穂 坂 昇殿 (松山)

電信電話記念日の表彰

去る十月二十三日の第三十一回電信電話記念日に次の会員各位にそれぞれ感謝状が贈られました。おめでとうございます。

四国電気通信局長表彰

(長年にわたり電信電話事業発展に尽力)

- 泉 節太郎殿 (松山)
 - 猪谷 嘉夫殿 (高松)
 - 小島 諺殿 (高知)
 - 豊崎二三男殿 (徳島)
 - 野本登美江殿 (松山)
- (長年にわたり用地折衝業務に従事し建設工事推進に尽力)
- 小澤 正満殿 (松山)

八幡浜電報電話局長表彰

(昭和五十一年以降多年にわたり管内の電柱敷地折衝業務に尽力)

- 堀口 義則殿 (八幡浜)

表紙のことば

莊野 丹秀 (内海)

昭和五十六年は酉年。皆様の幸と健康を祈って、元氣のよい鶏をかかせて載せました。

私十月の始め、松山市大街道の平和画廊で、電友会・共済会のご支援により、日本画の個展を開催させていただきました。画廊店主の話では近年にない盛況とのことでした。これも電友会の方をはじめ多数の公社関係の方々のご協力と厚く感謝し紙上を借りて深くお礼申し上げます。

共済会だより (三)

電気通信共済会四国支部

福祉相談所

◎お知らせ

このたび次のとおり「愛媛営業所」を新設いたしました。従来四国支部で取扱っていた愛媛県内にわたる現業的業務は、愛媛営業所の所掌となりました。

今後ともよろしく御協力御支援のほどお願い申し上げます。

所在地 〒松山市平和通四丁目一十

(旧松山北統制無線中継所構内で高いマイクロ無線の鉄塔が目じるしです。)

電話番号 松山(九九)二一六六五六(代表)
名 称 法人電気通信共済会愛媛営業所
所長 亀田 政雄

開設年月 昭和五十五年十月一日

◎OB大学(園芸科)実習を中心に

本年度第三回目の園芸教室は、六月六日、県緑化センターで「さし木のしかた」を中心とした座学と実習を行いました。

実習はセンターがあらかじめ準備してくれたさし穂を思い思いに切り、さし木し、ラベルで表示、センターのミスト温室を利用、その管理を依頼しました。

第四回目の九月十九日も県緑化センターで戸田先生から庭木全般の剪定方法と松のつみこみの実習を行い、前回管理を依頼していたさし木が根をおろし新芽が勢いよく伸びた苗木をお土産に持ち帰りました。

二回にわたり利用したこの緑化センターは

「緑と花のふるさとづくり」を目的として昭和五十二年六月に開所された施設で四ヘクタールの園内には芝生広場をはじめ、和風庭園、生垣樹、庭園樹、花木など各種の見本を展示しており庭木作りから整枝、剪定、病虫害管理、マイホームの造園計画に至るまで各種の相談にも応じているので、おおいに利用するようおすすめします。

◎電電職域OBのボランティア意識!!

このたび四国管内でサークルに加入している退職者等四七三名の方を対象にボランティアについてのアンケート調査をさせていただきました。

回収率は五〇%を割りましたが、電電職域のこれからの福祉を進めていく上に非常に参考となる事柄を知ることができました。

集約結果では、

①ボランティア活動に関心または興味のある方が約六五%

②呼びかけがあれば参加するという人は約六〇%にも達しています。

具体的な活動項目では、

①古新聞の収集、②一円募金、③街の美化運動等の順序となっていました。

どんな小さな事柄からでも、それぞれの人が分に應じて労力や、物品、金銭等を提供し、自分達の地域社会をよりよくしようという暖かいボランティアの心を感じました。

次に少数の方々ではありましたが、里親や在宅老人の身のまわりの世話、身障者が外出する際の介助などをしたという方もおられました。

非常に有意義な活動であります。一度きりでやめてしまったり、短期間でやめてしまったのでは、その成果をあげることはできま

せん。継続こそが力となります。無理のない活動を続けていただけのも期待しています。

この機会に電電職域に一人でも多くのボランティアが育ち、地域社会で活躍されることを願って、ボランティア研修座談会と銘うってサークル代表者の方々のご意見などをお聴きし、具体的な実践活動とその組織化のお手伝いのできればと、考えているところであり

◎高松、松山で文化講演会開催!!

(高松)

冷夏に明けられる九月六日(土)高松電話局の会議室に管内のOB五四名が出席、亀田所長のあいさつのおと、四国郷土研究会会長山田竹系先生が「栗林公園の七不思議」と題して、日本三大名園の中でも随一といわれる所以と郷土の誇る栗林公園にまつわる興味深い話をされました。

①栗林と名づけられた二千五百本の栗の植樹、②水量豊富な林泉のからくり、③戦略家西島八兵衛が高松開発のため郷東川大改修とあ有名な大鯉群生、盛衰の秘話、④園内随一の大茶亭「掬月亭」の水屋が僅か二畳半しかない不思議、⑤また掬月亭のらん干手すりが栗の五間におよぶ大木でつくられている。

⑥林泉の名園に石灯籠が皆無である謎、⑦新日暮亭こそ旧名茶屋「紅檠亭」であるなど。

また、玉藻城は昔三五の櫓のあった天下の海城であった。この築城は黒田如水と伝えられているが、真の築城者は赤穂城を築城し移封した生駒親正であるなど、正しい郷土史を後世に伝えたい、と結ばれ史実に基づく講演に昔が偲ばれました。

(松山)

秋雨けむる九月二六日(金)番町公民館大

ホールに、大河ドラマの解説で有名な平松勝太郎先生(県文化財保護協会理事)をお迎えして「獅子の時代」を中心とした「歴史と人間関係」というテーマで文化講演会を開催しました。

永年教育畑を歩んでこられ、日本史に造詣深い先生は、歴史は、後世の私たちに多くのことを語りかけていると前置きして「初心忘るべからず」「努力、天才をしのぐ」など歴史で有名な先人が遺した人生訓(先哲のことば)を噛みしめてほしいと解説したあと、幕末における「尊王と佐幕」「開国と攘夷」の対決の時代から明治のはじめ「追いつけ追いぬけ」の時代に生きた若き志士たちの反骨の炎とロマンのはなしに、青春の血がたぎる想いで傾聴しました。

また昭和三十八年「花の生涯」ではじまった大河ドラマは現在の「獅子の時代」まで十八回を数えているが、その筋書、作者、主演俳優等々、ユーモアを交え、立板に水、かくしやくたる話し振りにときのたつのを忘れませんでした。

最後に白虎隊の歌を朗詠され、獅子が立ち上る獅子の時代をほうふつとさせました。

電話のかけ方ポイント

「話し中」のときはつづけて

ダイヤルしてもかきません!

相手がお話し中のときはすぐつづけてダイヤルしても、つながるチャンスはごくわずかです。二三分待ってかけ直すと相手につながる割合が高くなります。



特 集

酉 年 に

ち な ン だ



赤 刎 正 (松山)

今年も私は年男(己酉)である。一般に十二支といえは動物によって人間を分類しているが、実は十二支は一年十二か月の陰陽の消長を基にして、年に、月に、日に、四季の変遷に、自然界の盛衰の順序を説いたものとのことである。

酉という字は、酒を入れる壺の象形文字で酉にサンズイをつけると酒、卒をつけると酔星をつけると醒というふうな酒に関する意味を持っており、酉年生れは酒好きが多いとか。

近年は占ブームで、当るも八卦当らぬも八卦、面白半分、興味本位の人も多いが、人間やはりその心の奥底には何かにすがりたいという気持、いつ何が起るか知れないという不安を大なり小なり持つており、占ブームもその反映とも見られる。

人間はそれぞれ異った年月日に生れて来、性格、顔貌、運勢も皆違ふ。そして一定の時がたつとあるいは幸福に、あるいは不幸な死を迎えるが、誰の意志にもよらないこの生と死、これを運命学者は宿命といひ、生から死へ運んでいく尊い自分の命を運命と呼んでおり、人間は自分の宿命を知ったうえで、最善の道を通るよう心がけることによって自分の運命は開拓することができるという説いている。

現代のように社会も人間関係も錯綜とした状況の中で、今後如何に生くべきか、新年を迎えるに当り、人生の原点に戻って考え直し

て見る必要があるように思う。

水 口 村太郎 (野村)

建てた電柱二万本以上、これが私の誇りです。とにかく七十一歳の今もひよいいと単車に乗り、朝から晩まで南予の山道を走る。仕事は電話線路の新設並びに支障移転工事等の土地折衝で、年をとっても仕事があり、私なりに仕事が出来るのが、なによりもの生きがいです。

若い局員と話をしたりして、気分的にも若若しく、一日の仕事を終ってその一日の工程の処理と計算をし、自分は老人と思わずにはげんでいると、老化を忘れてしまいます。私には二男四女があり、それぞれの孫たちに小遣いを渡すのが、なにより楽しみです。

さきの春の叙勲には勲七等瑞宝章を賜り、思いもよらぬ栄誉でこのうえもなく感謝しています。日暮に仕事から戻り、一杯のシウウチュウで上きげんとなり、明日もまた元気で頑張ります。

豊 崎 二三男 (徳島)

新年となつて六回目的酉年を迎えることになる。数え年七十二才。満七十一才である。年男又は年女と言われるが芽出たいようである。これほどでもなく、還暦とくらべると少し違つた感激である。日本人の年齢がのびたので六十才で還暦を祝い何となく老人扱をする習慣が変更された方がよいような感じがする。

それでは還暦をどう変えるかを試みにやってみると、まず十二支の中から何か一つを減らしてみよう。例えば千葉県のお寺の虎が逃げた評判を落したので除いてみると、十二支が十一支となり、これに十干との組合せをする

と、還暦までに百十年が必要となる。徳之島の泉重千代さん世界一の長寿者でないといふ還暦の祝ができない。それではあまり長すぎるので十二支を逆に二つ増して十四支とする。その場合パンダがどうも人気があるので這入って貰らい、その上に母性愛の本家本元らしいオーストラリアのカンガールを入れて十四支としてはと思う。そうすると七十年で還暦となるので現在にふさわしいのでなからうか。その折パンダは限と云う字を書いてパンダの目の隈を現わし、カンガールは袋と書いてその体を現わすのではどうだろうか?

いずれにしても元気で六回目的酉年を迎えたことを嬉しく思っています。年男、年女の皆さん、そして会員の皆さんのますますの元気を祈る。私は昭和六十八年の酉年にも元気でまた何か書いてこの会報に寄せたいものと思つています。

山 口 初 樹 (高知)

酉年おめでとうございます。あちこちの運勢を開いても、一白水星酉年生れは「年中バタバタと動くだけで、蓄財が不得手」とある。四十年の公社生活を昭和四十三年に終り数年すると、手指のはれ、熱、関節の痛みを感じました。そこで医者診断をよそにリュウマチ初期と自己診断。あてもない薬療法を続けていたうちに、一昨年の五月東京で順天堂大学塩川先生のリュウマチ講演は私にとつて天声であった。「医者である私があえて言う。薬に頼るな、原因療法のない病気は自分で適応した療法を見つけよ」

天の声にはヒントがある。ここからブラッシング法、西式健康法の取り入れ、理学療法と薬のいらぬ療法を見つける。一昨年の十

一月リユーマチ友の会高知集会で、患者さん
にこの療法を発表して関心と呼んだ。年一回
この会でも療法体験の発表をすることで活気
ができてきた。

おや！もう自分も古稀を過ぎた。いつの間
にやら老人クラブや退職者の会のお世話をさ
せてもらっている。一白水星生れの男のそば
には生活の波を集めた、助（女）監督がまあ
まあ健在。バタバタと羽音を立てる。恵み薄
い酉年男のこれからの人生のコマ写しのクラ
ンクを回してゆくことだろう。

志 摩 邦 康（徳島）

今年の干支は、辛酉の酉年である。大正十
年の生れは、干支がもとにもどって、所謂、
還暦となる。

還暦を迎えると、長寿を喜び、お祝いをす
る風習があるようであるが、平均寿命が延び
た現在、還暦といっても、長寿という実感が
わいてこない。何時の間にか、長い人生のひ
とつの節に到達したといったところだろうか。
それにしても、今年還暦となった辛酉年の
六十年は、干支の文字そのままに、辛い苦難
の激動の世代であった。よくこれまで、生き
抜いてきたものだとも思う。

華かであるべき青春時代を、第二次大戦の
渦中で過し、その影響を、もろに蒙った。
不敗を信じた戦さに敗れ、社会体制は、一
変してしまった。荒れ果てた焦土の中で、空
きっ腹を抱えたあれから、三十余年。いろん
なことがあったが、兎にも角にも、モノは豊
かに、便利な世の中になった。

空腹に堪えたことなど、遠い昔の語り草に
しか過ぎなくなってしまう。
豊かな生活に馴れるに従い、モノの有難さ

自然の恩恵を忘れようとし、便利になった反
面、科学の著しい進歩は、何時、何が起きる
か、先行きの予断を許さない、世相になって
しまった。

考えてみると、幸か不幸か、実に数奇な世
代に、生れあわせたものである。流離顛沛、
激動の世代を歩み、還暦を迎えたともがきの
余命に、神の加護と恩寵のあらんことを祈っ
てやまない。

鴨 谷 正 行（高松）

いつの間にか六〇才のとり年をむかえてい
ます。とり年のせいでもないが小鳥を飼うこ
とが好きで退職後芸術セキセイを飼い、優秀
な羽衣セキセイが生れて品評会にて賞を受け
たときは、いいようのないほど嬉しくて、ま
すます小鳥の飼育に夢中になっていきます。

そのほか人に笑われるような下手な盆栽を
作って自己満足に浸ったり、その上に金魚（
ランチュウ）を飼ったり、とにかく健康な今は
あれこれと忙しく過しています。

家族からは小鳥はゴミがして健康に悪いか
ら止めるように言われますが小鳥を見ている
と可愛くて時間の経つのもわからないほど楽
しいものです。

賞を受けるような羽衣セキセイが生れるよ
うに祈ったせいか、よい子が生れて、日曜日
には鳥仲間が見に来てくれます。

私の干支にあたる今年は自慢のできるよう
な羽衣セキセイが沢山生れ、無事に生長して
くれるように努力しようと思っています。

長 島 稔（徳島）

私は、大正十年生れの酉歳でありますので、
年男としては、今年、五回目を迎え還暦にも

当るわけでありませう。

私より上は明治四十二年（七十二才）、同
三十年（八十四才）、同十八年（九十六才）
で、実際に社会的にも活躍しているとすれば
三十年生れ位が長老と云う事になるだろうか
ら、その意味では、私は三番目に古い酉歳と
云えそうです。

今年生れは私より五代も下になり、「いよ
いよ年寄の鶏……」との感慨もよぎります。
しかし幸いに体は丈夫で、生来、呑気者の
こと、それ程には気にしておりません。

一つには、私の年代は、支那事変から大東
亜戦争勃発期が兵役適令で、大方は徴兵で出
征、多くが戦火の中に散り、天運あって生還
できても、敗戦の悲惨、荒廢に苛まれるなど、
青春の最盛期を文字通り命をかけた苦闘に明
け暮れたので、大抵の事には動じないものが
何とはなしに身に付いてきているからである
のかも知れません。

しかし、そのような私にも、年男としての
感懐の中に、九死を越えて生かされている事
の不思議や、退職後も何かにつけて温かいご
配慮を頂いている身の倅せを、しみじみと見
直す思いで、与えられたこれからの余生を、
一層の酬恩として、一日一日を大切に、精一
杯に生きて行き度いと、心新たなものを感じ
ている次第です。

平 井 孝 昌（高松）

公社を退職して早や三年が経過しようとし
ています。三十八年余の公社生活を大過なく
無事終了し、やれやれこれからは好きな盆栽
でもいじりながら、のんびり旅行でもして余
生を送ろうと思っていた矢先、縁者から遊ん
でいるのであれば、是非真鍋事務所を手伝っ

てほしいとの強い要請があり、一度はことわったのですが、電話当番位でいたい仕事ではないとのことで遂にお引受けした次第です。元来政治には無関心であり無知の人間である私が、この様な世界に足を踏み入れようとは想像もできなかったことです。事務所といつても女性の事務員（公社出身）と私の二人きりです。誰も指導してくれる者はなく、総て自分の判断で処理しなければならず、無我夢中でした。度々失敗をしては叱責を受けたものです。議員は毎週土、日曜日には殆んど帰ってこられるので、その都度議員に同行して香川県下を駆け廻り、議員が不在の時は各種会合に代理出席し、年中無休の状態です。盆、正月でさえ、この三年間満足に家庭で過ごしたことはなく、実に気苦労の多い困難な仕事です。秘書生活三年にしてどうやら大体の様子が分った程度で、三十有余年の楽しかった公社生活が今更のごとく懐しく思われてならない今日この頃です。健康のために入らな仕事ですが、余りにも重責で一日も早く引退したい気持ですが、今では引くに引かれぬ状況です。二年後には選挙が控えておりますが、その節は皆様方へ何かとお世話になることと思っておりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

福 山 登（高松）

私が盆栽に関心を持つようになったのは、五年程前でありました。当時、訳もわからずに「さつき盆栽展示会」のお話をしたのが

そもその始まりです。はじめは、見るものが奇麗で、変わったものがあれば欲しくなったものです。鉢物と盆栽との区別など到底できませんでした。それでも水をやりたり、肥料をやったりすると、それなりに報いてくれるものがあります。花を咲かせたり、実を付けたりで、結構愛着を感じます。二回目の「さつき盆栽展示会」のときでした。おおよそ八十点程の出展作品がありました。そのうち金銀銅等受賞作品の殆んどは二十年以上も経過していると思われるものはかりました。さすがに立派です。樹形といい、幹の太さといい、根張りといい、丹精こめた盆栽とよく言われますが、この丹精を二十年以上も続けることは、これは容易なことではありません。愛情と趣味がなければ続けられません。暇もできたので今年から熱を入れてやってみようと思っております。始めるのが遅すぎるくらいはあるが楽しみにやりたい。幸い昨年は小品盆栽の受講もできたので、この教えを活用してみようつもりです。

藤 井 彰（丸亀）

昭和五十六年は、辛酉の年である。その一月の干支は己丑、その一日の干支は己卯に当る。時刻に配当する干支は、その日の十干により、一日のうち十二回変化するので、その一月一日中の一例をあげれば、午前十一時から午後一時の間は庚午である。

そこで、辛酉の年にちなんで、思いつくままに、簡単に記してみたい。干支は股代及び周代には、おもに日を数え

る記号であったが、戦国時代になると年月を数えるために用いられるに至った。

辛の古形は、短剣で刺すさまを表わし、そこから刺戟的であるさま、さらに広がって、からい、つらい、苦しいなどの意味に使用されるに至ったものである。辛は十干の第八位に当り、陰陽五行説においては、辛は庚とともに金（陰）に配され、辛の和訓がかのと決まったのは平安朝に入ってからとされる。

西の古形は、酒を醸造する器の形を象ったものである。酒は、秋の八月に黍が成熟してから醸造するので、成る、老いる等の意味に用いられる。西は十二支の第十位に当り、方位では西、季節では仲秋の八月、律呂では南呂に、時刻では午後五時から七時までに、陰陽五行説では金（陰）に配している。

股代につくられた十二支のそれぞれに戦国時代に至って動物を配する際に、西に雞を当てた理由はさだかではないが、他に鳥に関連するものが一つもなかったこと、雞が鳥類の中で身近なものであったこと、西の古形が水鳥のおよぐ形に見立てられたことによるものであろう。

中国では先秦の時代から辛酉の年には革命が起るとの説が主張されていたが、漢代から盛んに行われ、実際の革命を避けるため、辛酉の年に改元を行うべきことが唱えられた。特に、一元（六十年）の二十一倍にあたる一部（ほう）すなわち千二百六十年ごとの辛酉の年には大變革があるとされていた。この説に基づいて、神武天皇の即位の年は、推古天皇の九年（西暦六〇一年）の辛酉の年から一節さかのぼった辛酉の年に定めたのである。時に推古天皇の十二年（六〇四年）であった。辛酉の改元は、桓武天皇の天応（七八一年）

に、はじめて行われたが、次の仁明天皇の御代（八四一年）には行われなかった。日本紀略によると醍醐天皇の昌泰三年（九〇〇年）十月二十一日に、文章博士三善朝臣清行が明年辛酉の年に改元すべきことを上奏し、（庚申三年十月廿一日乙亥。文章博士三善朝臣清行上明辛酉革命議）翌、昌泰四年七月十五日に延喜と改元された。（七月十五日。改昌泰四年為延喜元年）その後、正親町天皇の御代（一五六一年）及び後水尾天皇の御代（一六一一年）に中絶し、靈元天皇の天和（一六八一年）に復活し、孝明天皇の文久（一八六一年）に及んでいる。

辛酉の改元は天応（七八一年）から文久（一八六一年）までに十六回行われ、その間に改元のなかった辛酉の年は上記のとおり三回のみである。

横井貞夫（高松）

酉とは何かと常に手にしたこともない暦なるものを見ることにした。

なるほどいろいろと書いてある。その昔年寄が子丑寅卯辰なんて云って方角がどうかとか凶とかそれに関係づけた話をしているのをよく耳にしたものであるが何のこともか一向に分らず興味もなかったから今もって十二支の順序も分らずチンプンカンプンである。

さて暦の中に書いてある文章のところを讀んでみると非常に良いことが書いてある。人間生活の考え方や行動のチェック的なものがそれぞれ星に分けて記述してある。なるほど一応感心しながら目を通した。

また国語辞典をみると十二支の第十、にわとり。時刻では午後六時、むかしの六ツ。方角では西となっていた。ひとつだけ合っている。

たのはにわとりである。わが年代ではかしまになるまでも生きられず若どりて終った者が多くいる。使い頃使われ頃に大きな戦争にまき込まれた。人生山の登りを半ば過ぎたところであった。これから景色もよくなり、山の味もでてくるというのに。

人生山に登りきると人生峠があった。その峠には茶店があり展望台もあった。周辺の景色を見ながら束の間を楽しむともう人生山も下りの一方だけである。もう登りの道も花も転じたことも忘れこれから歩く道のみつめ、なるべく楽しい気持ちもちたいものである。太陽は公平に照らしながら廻っている。

酉の歳の男女、頑張りましょう。

陶山靖子（高松）

今年はトリ年、私はトリ年、トリ年の私トリ年を前に人生の大きな転換期を迎えようとは運命のしからしむるところとはいえ余りにも大きなショックでした。

二十五年間一つ屋根の下に生活を共にした夫の母が五十四年の暮近く突然入院しなければならなくなり淋しさと忙しさの生活を送りながらも少しずつ快方に向かう喜びを感じていた矢先、薬石のかいなく五十五年三月半ば世を去りました。この悲しみの中で、前から少しづつ衰えはじめた義父も、義母の葬儀の日からばったりと床にふし、手がかりつきりとなり、それも三月をたたくして義母の後を追ってしまいました。

こうした中で私も二十八年間勤めてきた電ウーマンとしての生活に別れをつけなければならなくなりました。考えれば考えるだけ借別の情振り切りがたいものがありました。

あれから半年毎日一人で家事に追われながらも生活のリズムに乗りきれず時にはいらりする気持ちにかられることもありました。やはり二十八年間の職場生活のリズムは重く、そして私にとっては大切な歴史であったようです。毎日が仕事に「はり」を見出し、通勤途上、局内の多様な情報の中で厳しさを感じながらも心満された日々も今はなく、何をするにも孤独の中に入り込んだ淋しく空虚な気持ちにとらわれがちでした。

しかし、ふりかえると私の二十八年間も父母によって守られた家庭に支えられた毎日であったことを強く感じずにはいられません。誰かが家で夫・子を守り、暖か味のある家庭をつくるのはやはり主婦だ、専ら主婦としての生活に生きようと、その中で電電公社生活で得た総てのものを何一つ失うまいと固く心に決めています。当り年の今年こそ幸運の来たらんことを念じつつ。

OBサークルだより

桜井海岸の花野を行く

（第三回えひめ歩こう会記）

梅雨まがいの雨天ばかりが続いた夏がすぎ、やっと秋晴れとなった九月二十一日、私どもえひめOB歩こう会員五二名は、今治市郊外の桜井国民休暇村へ向った。

市駅前を九時丁度貸切りバスで出発し、四国山脈を右に、瀬戸の海を左にめぐりながら十時半、歩く起点地、桜井バス停に到着した。そこから、歩こう会旗を先頭に、まず海岸へと進んだ。

NHKの大河ドラマ「風と雲と虹と」で、

天慶時代（九三九年〜九四七年）ここ桜井に国府がおかれたことを知ってから、一度は訪ねて見たいものと、熱望していたのである。それが、やっとかなって、身も心もはずんだ間もなく、海が開け、広い長い砂浜が続く。都びとが、ここに小舟を寄せて上陸したのでろうかと思いつくしながら、ふと陸地の方を見ると、周囲をぐるりと松で囲み、よく手入れた芝生の原っぱが目についた。進むほどに、そこは、網敷天満神社の境内とわかった。そしてそこに、

「白浜やとしへる松に暮の月」

「松に月、しばしはなれて月の松」と読める句碑があり、二日後に満月をひかえていたこととて、ここで見る月の素晴しさを想像した。また同じ碑に、

「忘れてはならぬ故郷の花どころ」

とあり、それによって、桜井が、昔から花の名所であったことも知った。

そう云えば、さきほどの砂浜には、手折って帰りたいような紫の小花が群り咲いていたし、進む道の両側には、いたどり、萩、菖、ススキ、野菊、われもこう、数珠玉など秋の草花が風に美しくゆれていた。

この花の道は、行きかう自動車も少なく、平坦で、その上、目的地までの殆ど半分は、松並木が続いていて歩き易く、一行は大満足であった。

それにしても、これほどの松が一本も枯れていないことに驚くとともに、この地域の人達の、なみなみならぬ丹精に感謝した。

目的地の休暇村に到着したのは、予定時刻三十分前の十二時半であった。誰もが、六キロもの行程をなんなく歩きお世話したことを喜び、「つぎもまたね」と誓いあった。

（須賀田）

電電OB軟式テニスの歩み

電電OB軟式テニスクラブが出来て早くも三年になりました。当初十八人の会員をもって発足したのですが本年四月現在では、二十五名になりその活躍も目覚ましいものがあります。昨年は全国電電OB親善大会を松山で五十余名が参加して行なわれ四国は団体、個人共に優勝、本年度に入り地方大会にて四国選手権、秋季愛媛県選手権に木村組が、また愛媛県スポーツ大会では吉村、溝田組が、敬老の日大会では小松組がそれぞれ優勝するなど電電OBの名が新聞にも出て大いに意気があがっている次第です。

なお春秋に行なっている練習会では今年も春季が酒井、玉木組秋季は木村、溝田組と若手と老人組が仲よく優勝しています。最近ではテニスブームで初心者の方も熱心に行っていますが皆さんも健康のために始めて見ませんか、大いに歓迎します。（木村利一記）

愛媛電電OB囲碁同好会発足

かねてより発会の機運のありました囲碁同好会設立の話し合いが、昨年六月半ば発企人数名で持たれてから、二月余り、会員も四十一名になり、去る八月二十四日第一回囲碁大会を松山市二番町の松山囲碁会館で開催しました。熱戦の末次の諸氏が優勝されました。なお、県内同好の方々の入会をお待ちしております。

- A組 (五段〜二段) 浅井五段
 - B組 (二段〜初段) 菅 二段
 - C組 (一級〜三級) 水野一級
 - D組 (四級〜八級) 勝浦五級
- (世話人 四国通信サービス(株)松山支店 水野 四三―五五五二)

莊野画伯個展盛會に終る

会報表紙絵でおなじみの、莊野丹秀画伯個展が十月三日から五日まで松山市大街道、平和文具二階の画廊で、四国電友会会長、電通共済会支部長推薦で開催されました。

三十二点の力作が展示され圧倒的でした。個展は愛媛新聞の「一会と展示」案内欄に掲載されたこともあってよく知られ、松山の絵の愛好家や玄人画家の顔を見受けました。電電OBはもちろん若い電電マンも多数見えて大盛會となりました。

予約済の掛軸と同じものをと注文される方、親戚の新築祝いに、またお祭りには新しい絵を掛けたいと予約なさる方などがおられました。

最終日の日曜日には元県立図書館長で明徳短大の永田政章先生が見えられ力強い筆致で素晴らしいと賞讃されていました。(片岡記)



福田 秋風郎(松山)

また明日へ一と鞭当てるコップ酒
新聞を廻し読みしてベッド閑
万歩計そのいくばくを歩道橋
大仕事私も耐えた手術台
町長選アツと言わせた法の裏

合田 勇(松山)

カロリーをとやかく料理味が落ち
運動会孫の応援して疲れ
露天商千円札へ石をのせ
乳母車朝露を踏む杖にされ
酒飲むな煙草のむなと聴診器



随筆

YS 11で

上田 昇(松山)

奄美空港はすこし雨が降っていた。出発前に「鹿児島上空の状態が悪いので、宮崎空港に着陸することが……」の機内放送。

YS 11は順調に飛行。鹿児島基地が下に見える。鹿屋を過ぎるころから次第に雲が厚くなる。「着陸、ベルト着用」のランプがつく。プロペラの音が少し小さくなり機首をやや下げた。「ああ、着陸するんだ」と思う途端プロペラの音が一段と高くなり上昇しはじめた。どこを飛んでいるのか五里霧中、二〇分ほどするとさきに見えた「XXセイコ」と白ペンキで書かれた屋根が目にはいる。旋回していたのだ。ランプがつく。やっぱり厚い雲にさえぎられ全然地上が見えない。機は上下左右にはげしく揺れる。

機長から「鹿児島空港が見えませんが種子島空港へ行きます」との説明があった。こんなことで種子島空港におりた。待機すること約一時間三十分。再度、鹿児島へ、三回目の着陸も失敗。四度目の着姿勢になる。右窓に桜島の茶褐色の噴煙が見え硫黄の臭が機内に流れる。雲が切れた。三時間三十五分遅れてやっと着陸。

「種子島―鹿児島を往復したら九、二八〇円だから、もうけたんだらうか……」
「鹿児島に泊して明日は見物してかえる

か、わざわざ来たら往復の旅費がまたいるから………ついでに………」
「お土産は程々にせんと………今夜のホテル代あるかしら………」
「YS 11はだめだね。あーしんど」
等々の声にうなずきながら飛行機を降りる。

詩吟教室

後藤 稔(大洲)

大洲は詩吟のさかな所と聞いていた。去る二月に八幡浜から霜の多い、霧の深い大洲市菅田能登団地へ転居した。まず至善流大洲吟詠会丑尾会長宅を訪ねて入会し、近くにある西公会堂へ毎週土曜日に通うことになった。先生が良かった。玉井先生の声は全くすばらしいのに、生徒の集りが悪く、田舎時間で先生が先に来ている始末。それも四月、五月、六月、七月と経つ内に、先生の熱意で生徒も十名となり、私が教室長に選ばれて、西教室発会式をする話がまとまった。本部から会長外七名の来賓をお招きして、参加者二十一名になった。

宴会になれば一番先に帰ってこるほど酒に弱い私、しかも土地の習慣を知らないよそ者の私が、たくみな司会に酒が回り、夜ふけまで飲んで話を楽しんだ。最後まで残って後始末までしたが、詩吟を通じての心のふれあいは兄弟のような親しみをおぼえた。

在職中の体験を生かして

酒井 秀雄(宇和島)

昨年七月なつかしい宇和島報話局で同じOBの大森さんと二人で一週間を半分に分けて防災工事の監視員として働いた。

仕事の内容は既設局舎の機械室を対象にしてハロン消火設備と煙感知器の設備をするもので生きている機械の天井裏の作業で神経を使

う工事である。自分では、はりきってやっている考えだが側から見るとさしてどう見えるだろうと気になった。公社で体にしみこんだ安全作業、事故防止、火の用心、塵埃の防止作業に誠心誠意とりくんだ。

平凡な仕事は実行がむづかしいもので公社の体験が役立ってお金になっている。DEX電源近くの養生作業には直流短絡のこわさを話し、若い作業員に協力を求め、終った時安心したのは私の方だった。仕事に出る朝は私の顔付がちがうと家内が言い、無事仕事を終り夕食のビールの味は又格別にうまい。

この仕事についてのOBの連絡で感謝している。防災工事は四国の管内にまだまだあるそうだから、その土地のOBの方は是非協力してあげて下さい。

気ままな長寿者

高橋 数一(西条)

私の家の近くの加茂川に、流れの部分だけに架け渡されている八十米ばかりの板橋がある。町からの帰途、自転車を押しながら渡りきったところ、橋の袂の広場に自転車を立ててそのそばにしゃがんでいる老人から、「一服して行かんかな」と気安げに声をかけられた。だが、一向見覚えのない老人である。

「わしは未年の生れで、いま八十六になる」と老人は問わず語りに説明した。しかし、私は疑った。すると、その表情を読み取った老人は、「誰でもわしを十以上も若く見るといい、「それはわしが元気で、からだのどこにも悪いところがないきにしゃ」と自慢した。明治何年生れかと訊くと、二十八年だという。それなら未年と間違いない、八十六というのも数え年として嘘ではない。

「大工をしとった」と語り、あの家もこの家もわしが昔建てたのじやと、付近のあちこち

を指さした。「八十一までは人に負けずに働いた。じゃが、いまでは気ままに暮らして行く。行きたいところへはどこへでも自転車で行く」と、立ち上ってサドルを叩いた。老人は蓑をつまみ出して吸った。蓑が好きかと訊くと、「うん、一日にこれを二つ軽く吸う」という。「わかば」を四十本も吸うらしい。酒はと問うと、盃一杯がやっとうら好きではないと答えた。ところで歯は？「とうから総入れ歯じゃ。甘い物ばかり食うきにのう」とのこと。どうやら、長生きの原則外のところで暮らしているようだ。

もはやひ孫もいるだろうと訊くと、「おらん。いまだに子供だつてよう造らん。逃げた女房がほかへ嫁入って、沢山産んどるらしいがのう」とけろりとしていた。

別れぎわに「長生きしたところで、元気でなかつたら値打がない。おいはんも精一杯元気で長生きおしよ」と言ってくれた。

高知やまもも句会抄

海遠く大かがりして解夏の庭
青竜寺土堀に沿ひて貴船菊
たたみくる滝の嵐を襟足に
雑草の中に咲き出て曼珠沙華
不動尊海見て在す秋の寺
秋潮やきらめく海に浅蜷舟
石仏に触れつつ咲けり額の花
寡婦の家に長雨つづく夕木槿
岩清水篋にうける石路の皿
主逝きし隣の空家葡萄熟る
紫陽花の一輪あわし雨に濡れ
手にとれば蔓荊の花美しき
牛啼いて牧場に梅雨の雲垂るる
釣舟に女もまじる葉月潮
裏庭は裏山つづき竹の春
海風に孕む日傘や秋暑し
鱈舟の流してながき錨綱

大西 瓶子
岡村 俊
小松としみ
溝淵乃文字
道倉ただを
太田 佳代
今西 重信
別役 幸子
岡崎 花子
河野青電子
田村 啓子
松村 白鶴
田中幾久子
井上すみ子
田ノ内露風
小笠原ひろみ
井上ひろし

余 栄

ご逝去されました左記の方々に対し多年電気通信事業に貢献されましたご功績により叙位叙勲が授与されました。

正七位勲六等瑞宝章(五五・五・三五)
故 渡辺喜八郎殿(丸 亀)

從六位勲六等瑞宝章(五五・六・一一)
故 齋藤 満殿(徳 島)

正七位勲七等瑞宝章(五五・六・一八)
故 山口 正治殿(今 治)

從七位勲七等瑞宝章(五五・六・三三)
故 山野 壽一殿(丸 亀)

從七位勲八等瑞宝章(五五・六・三〇)
故 早川八十八殿(阿波池田)

正七位勲七等瑞宝章(五五・七・一四)
故 岩本 好喜殿(八幡浜)

正七位勲六等瑞宝章(五五・八・七)
故 正岡 国光殿(伊 予)

訃 報

次の方が亡くなられました。謹んで哀悼の意を表しご冥福を祈ります。

| 氏 名 | 死亡月日 | 行年 | 所 属 |
|---------|----------|----|-----|
| 山口 正治殿 | 55.6.18 | 六八 | 今治 |
| 松井 照子殿 | 55.9.4 | 七六 | 松山 |
| 大熊ヨシエ殿 | 55.9.15 | 七三 | 高松 |
| 植松 利秋殿 | 55.9.16 | 七六 | 高松 |
| 來田 貢殿 | 55.10.22 | 七一 | 坂出 |
| 西沢 徳殿 | 55.10.29 | 六六 | 徳島 |
| 鎌倉 兵一殿 | 55.11.9 | 六三 | 高松 |
| 伊賀上鬼子雄殿 | 55.11.25 | 七六 | 松山 |

投 稿 規 定

一 会員消息 四〇〇字以内
二 短歌、俳句、川柳 五首又は五句以内
三 随筆、随想 六〇〇字以内
原稿締切 二月一〇日
原稿の取扱についてはお任せねがいます。

編 集 後 記

▽初暦めくれば月日流れそむ 播水
あけましておめでとうございます。去る十一月十四日成立の共済年金第二法案をもって、五十五年年度の年金関係法案がすべて通ったこととなります。次は五十六年度の共済年金の動向ですが、恩給増額については概算要求が仮定俸給の四・二%プラス五三〇〇円、四月実施として審議されつつあるので、これに副って共済年金も改正されるのではないかと思われまます。

▽共済会の「退職者文化活動援助事業」もいよいよ軌道にのり、各地ですていくつかのサークルも誕生し親睦を深めています。感謝するとともに積極的なご参加を切望します。

▽次号四月号の特集テーマを「春」としました。春にちなんだ各位の玉稿(ハガキ通信程度)をお待ちしております。(玉川記)

電友会四国連合会会報 第三三号
昭和五六年一月一日発行

編集発行 電友会四国連合会
局 事 務

松山市一番町四丁目(〒七九〇)

四国電気通信局内

電話(〇八九九)三六一二〇二三

印刷 四国電話印刷株式会社